特　集　試される宗教リテラシー

# ホラーと宗教リテラシー

## ―鈴木光司『リング』にみる憑依と供養―

斎藤　喬[1]

1991年に出版された鈴木光司の小説『リング』は、「不幸の手紙」形式の「呪いのビデオ」にウィルス感染の恐怖を織り交ぜた都市伝説ホラーである。この恐怖の前提にある怨念の憑依と遺骨の供養の問題を、本稿では宗教リテラシーの観点から検証する。

[1] さいとうたかし：南山宗教文化研究所特任研究員

## 1.『エクソシスト』の「嘔吐袋」

本稿は、現代的なホラー作品の前提にある宗教文化的背景について検証し、これらの作品による恐怖体験が、受け手の宗教リテラシーにどのような役割を果たすかを考察することを目的としている。ここではとりあえず、宗教リテラシーを、当該社会の宗教文化に適応する形で宗教情報を受信し発信できる能力としておく[1)]。

ジャンル・ホラーを標榜する小説や映画は、その制作意図からして読者や観客を怖がらせようとするだろう。そして、理想的な受け手であれば、その作品に目一杯恐怖するはずだ。こうした恐怖体験に宗教文化的な知識や経験が必要になるとしたら、ホラー作品に怖がること自体をある種の宗教実践として観察することができる。これは、受け手が自分の信仰にどこまで自覚的であるかは別にして、作品の恐怖によって事前の信仰を強化する、あるいは恐怖体験によって信仰生活を改めるという側面に焦点を当てることでもある。

しかしながら、そんなものは怖くもなんともないという人もいるに違いない。ホラー作品の表現は、受け手として想定される万人に恐怖をもたらそうとすることから、怖くもなんともない人々にとって、作品が含意する宗教文化の経験は、宗教に関する情報を入手して知識を獲得する契機に見立てることができるだろう。

以上の問題関心から、ここでは具体的に鈴木光司の『リング』を取り上げ、憑依と供養を主題としてこの小説が読者に引き起こそうとする恐怖の分析を試みる。作品にとって理想的な恐怖体験となる読書行為が含意する宗教文化的な知識や経験を検証することで、この作品による宗教リテラシーへの寄与について、その一端を明らかにできればと思う。詳しくは後述するが、この「憑依」と「供養」は、『リング』の物語においてホラーの鍵概念として導入される用語である。

池上良正は、近世から近代の民衆的な宗教文化の中核に、死者との個別取引に頼る〈祟り―祀り／穢れ―祓い〉システムと仏教的な理念を活用した〈供養／調伏〉システムがあったことを指摘する。その上で、このシステム

を定型的に取り込んだ「祟り物語の商品化」の代表的な怪談物として、鶴屋南北の『東海道四谷怪談』、三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』と『怪談牡丹燈籠』を挙げている[2)]。本稿では先行研究を踏まえて、1991年に出版された『リング』を、1970年代以降のオカルトブームや1980年代以降の占い・おまじないブームの社会的文脈に対応した「祟り物語の商品化」と捉えるが、その際〈供養／調伏〉システムの機能不全が一つの問題となるだろう。というのも、“リング”シリーズにおいては、仏教僧が祟りを根本的に解決することもなければ、貞子の怨念が明確に慰撫されることもないからである。

また、一柳廣孝は、つのだじろうのマンガ『恐怖新聞』と『うしろの百太郎』が連載を開始した1973年を、それ以降に日本で発生したオカルトブームの端緒として文化的文脈と認識論的枠組みの分析を行っている[3)]。一柳によれば、『うしろの百太郎』においては、心霊学の基本概念を説明する登場人物の配置や、雑誌に寄せられた心霊体験がマンガ内で紹介されるなどの仕掛けによって、作品自体が心霊学の知見を身に付けるための教育的役割を果たしていたという。オカルトブームを牽引した作品のメディアとしてのあり方を、受け手との交通という観点から動態的に捉えたこの論考は、宗教リテラシーから『リング』を考察する上でも非常に示唆に富むものである。

本論に入る前に、ホラー作品と宗教リテラシーの関係について本稿の視座を提示しておこう。そこでまずは、オカルトホラーの最高峰と名高いウィリアム・フリードキン監督の映画『エクソシスト』（1973年）に触れておきたい。原作はウィリアム・ピーター・ブラッティの同名小説（1971年）だが、映画の公開は社会的なセンセーションを巻き起こした。有名ホラー映画の背景にある実際の事件を収集したリー・メラーは、『エクソシスト』の衝撃はそのグロテスクな描写もさることながら、最も問題となったのは「神聖への冒涜」であると指摘する。

> アメリカ全土の映画館にとって、ウィリアム・フリードキン監督の『エクソシスト』は前代未聞の映画だった。なにしろ、吐き気をもよおす観客が続出したのだ。そのため、チケットと一緒に「嘔吐袋」を渡す、あ

るいは客が卒倒した場合に備え、この映画を上映することをあらかじめ救急車に通知しておく劇場もあった。ひどく下品な言葉や、ねじ曲げられた体、吐き出される体液、（ときに赤裸々な）未成年者の性的描写などが、観客のそうした反応を引き出す大きな要因となったが、その一方で、急速に文化が変化する時代背景のなか、『エクソシスト』は観客の目の前に、これまでに見たこともない神聖への冒涜を突きつけた[4)]。

当該社会における宗教文化的背景を観察する上で重要なのは、この作品が表現する「神聖への冒涜」が観客の嘔吐を誘引しかねないという上映にまつわる挿話（エピソード）である[5)]。当然のことながら、どのような映画の解釈も一様でないため、「神聖への冒涜」と言っておけばこの作品の宗教文化的背景が理解できるわけでない。しかしながら、『エクソシスト』に関して言えば、公開自体がセンセーションとなったという社会的事実を「神聖への冒涜」という断定によって受け入れ可能なものとする文脈こそが、宗教リテラシーを考える契機となるのである[6)]。

「神聖への冒涜」に関連して、文芸評論家の笹川吉晴は、映画の原作となったブラッティの小説は、その後にスティーヴン・キングが一般化することになる〈モダンホラー〉の方法論から見ても記念碑的作品であると指摘していて興味深い。

本格的なモダンホラー時代への突破口となったにもかかわらず『エクソシスト』は、実は大方のモダンホラーとは反対方向のベクトルで出来上がっている。〈モダンホラー〉と呼ばれる作品群が〈神〉に捨てられた――あるいは自ら〈神〉を捨て去った現代人の“絶望”を描く物語であるなら、『エクソシスト』はその絶望の中でなおかつ〈神〉を追い求める“信仰”の物語である[7)]。

『エクソシスト』は、精神病理学者でもあるカラス神父が、母親の死によって失いかけていた信仰を、先達であるメリン神父と執り行う悪魔祓い（エクソシズム）の儀礼の過程で取り戻すという筋書きにおいて、不信仰のまま終わる他の

多くの〈モダンホラー〉作品とは一線を画すと、笹川は指摘する。ただ、小説の『エクソシスト』が「“信仰”の物語」であるすれば、「〈神〉を捨て去った現代人」は絶望の中でこの作品に何を求めているのだろうか[8)]。

映画版に比べて、原作は神学的であると言われることもあるが、小説の『エクソシスト』は〈モダンホラー〉であるがゆえに、より高度な宗教リテラシーが必要になるかもしれない。なぜなら、作品によって想定される読者は、たとえ〈神〉を追い求める信仰をすでに失っていたとしても、読書行為によってそれが取り戻される過程を理解できるほどに宗教的な教養を身に付けていることになるからだ。

このように、たとえばアメリカの映画館に『エクソシスト』を見に行って、「嘔吐袋」を渡された場合に取るべき社会的振る舞いを考えるためには、たとえば「神聖への冒涜」といった、作品に含意されているとされる宗教情報の理解が欠かせない。それに対して、映画館で見せつけられた「神聖への冒涜」によって実際に嘔吐したり卒倒したりする人にとって、宗教的な教養はあまり問題にならないだろう。こうした拒否的な身体反応は、『エクソシスト』のホラーが観客に期待する信仰生活を、事後的にだが体現することになるからだ。

それでは、以下においては鈴木光司の小説『リング』を対象に、宗教リテラシーの問題について考察してみよう。

## 2. 感染ホラーと幽霊ホラー

『リング』は原作となった小説から派生し、映画やテレビドラマ、漫画やゲームにもなり、今や貞子はツイートする公式アカウントまで持っている。言うまでもなく、書籍や映像だけに留まらないホラー・コンテンツとなった“リング”の世界は、増殖を続ける貞子の圧倒的なビジュアルとともに、誰もが知る娯楽メディアとなっている。全作品を取り扱うことは不可能であるため、ここでは特にオリジナル・リングとでも言うべき初版本に焦点を当てて、それ以外の作品への言及は最小限に留めて検証を進めていく。これには、小説の“リング”シリーズは前作の設

定を覆す種明かしを軸に展開するため、他の作品に踏み込み過ぎると『リング』の内容自体を問題化しにくくなるという事情もある。

執筆時点の2023年9月において、鈴木光司による小説の“リング”シリーズは『リング』(1991年)、『らせん』(1995年)、『ループ』(1998年)、『バースデイ』(1999年)、『エス』(2012年)、『タイド』(2013年)の計六冊を数える。しかしながら、2000年当時においては、『リング』『らせん』『ループ』三部作に番外編の『バースデイ』を加えて一度完結したことになっていたため、そこまでの主な関連作品を年代順に列挙すると以下のようになる。

| | | |
|---|---|---|
| 1991年 | 6月22日 | 小説『リング』初版発売(角川書店) |
| 1993年 | 4月22日 | 小説『リング』文庫版発売(角川ホラー文庫) |
| 1995年 | 8月3日 | 小説『らせん』初版発売(角川書店) |
| | 8月11日 | テレビドラマ『リング〜事故か！変死か！ 4つの命を奪う少女の怨念〜』放送(フジテレビ) |
| | 9月27日 | 小説『リング』改訂版発売(角川書店) |
| 1997年 | 11月28日 | 小説『らせん』文庫版発売(角川ホラー文庫) |
| 1998年 | 1月23日 | 小説『ループ』初版発売(角川書店) |
| | 1月31日 | 映画『リング／らせん』公開(東宝) |
| | 9月10日 | ムック『冒険者ガイド　ループ界』発売(角川書店) |
| | 12月18日 | 小説『the Ring〜もっと怖い4つの話〜』発売(角川書店) |
| 1999年 | 1月7日〜3月25日 | テレビドラマ『リング〜最終章〜』放送(フジテレビ) |
| | 1月14日 | ムック『リング2　恐怖増幅マガジン』発売(角川書店) |
| | 1月22日 | 映画脚本『リング　リング2　映画脚本集』発売(角川ホラー文庫) |
| | 1月23日 | 映画『リング2』公開(東宝) |
| | 1月30日 | 小説『バースデイ』初版発売(角川書店) |
| | 7月1日〜9月23日 | テレビドラマ『らせん』放送(フジテレビ) |
| | 12月8日 | 小説『バースデイ』文庫版発売(角川ホラー) |
| 2000年 | 1月19日 | ムック『リングθ　恐怖増幅マガジン　The貞子』発売(角川書店) |
| | 1月20日 | 映画脚本『映画版脚本　リングθ　〜バースデイ〜』発売(角川ホラー文庫) |
| | 1月22日 | 映画『リングθ　バースデイ』公開(東宝) |
| | 9月8日 | 小説『ループ』文庫版発売(角川ホラー文庫) |

こうして見ると、1999年は『リング～最終章～』、『らせん』と一年間で2シーズン分のテレビドラマが放送され、映画『リング2』も公開されて映画脚本やムックも発売されている。さらに小説『バースデイ』も、単行本と文庫版が同年に出版されており、社会現象としての“リング”ブームにおける一つのピークを迎えているように見える。

小説の“リング”シリーズではウィルス感染が重要なモチーフになっていることから、どのような時系列でどのようなメディアによって公表されたかが、“リング”増殖の経緯を知る上で有益な情報となる。というのも、『リング』と『らせん』には読者を作品内の感染に巻き込む仕掛けが施されているからなのだが、ひとまず小説の“リング”シリーズに共通する恐怖の仕掛けを「感染ホラー」と呼んでおくことにしよう。

1991年に初版本が刊行された『リング』は、「不幸の手紙」形式の都市伝説をモチーフにしたホラー小説としてすでに古典の域に達している[9)]。「呪いのビデオ」というオカルト的な怪異現象を鍵概念に科学的なウィルス感染との類比によって一般に浸透させた点で、今日から見るときわめて画期的なホラー作品として文学史にその名を刻むこととなった。だが、この作品の知名度を上げたのは、1993年の角川ホラー文庫とその後の映像化であると言われている。

よく知られているように、1995年にはテレビドラマ版の『リング』（瀧川治水監督、飯田譲司／祖師谷大蔵脚本）が放映され、さらに1998年に映画版の『リング』（中田秀夫監督、高橋洋脚本）が公開されたが、特に後者は貞子の映像表現によって誰もが知るところだろう。原作では、都市伝説のように伝播する「呪い」と科学的現実として認識される「ウィルス」が複合的に絡み合う。登場人物たちはウィルスの発生原因を究明するのだが、これは呪いの原因となった死者を捜索する筋書きと重なり合っている。

それにしてもホラー映画史に「Jホラー」の楔を打ち込んだ映画『リング』の恐怖は、小説版とは全く異なるものである。ブラウン管テレビに映し出された井戸から山村貞子が這い出てくるあの名場面は、観客を否応なく呪いの当事者にする恐怖の演出だとしても、原作の小説とは同質

のものではない。というのも、映画では貞子の呪いによってビデオを見た者が原因不明の死を遂げるのではなく、貞子自身が「呪いのビデオ」から出てきて見た者を取り殺していくからだ。これについては、映画の“リング”シリーズの世界観を統括した脚本家の高橋洋の記述が参考になるだろう。

> 迫り来る幽霊の恐怖に私はずっと取り憑かれていた。だがここがしばしば誤解される点なのだが、幽霊が怖いのは襲いかかって来るからではない。それでは生身の動物、殺人鬼や猛獣の怖さと変わらない。下手をすれば迫り来る幽霊の姿はひどく人間臭いものになりかねない危うさをはらんでいる。多くの人々はここが恐怖映画の鬼門であることを理解していない。
>
> 幽霊が怖いのはそれがこの世のモノではないから、その一点につきる。生身の人間が演じるほかない幽霊からどうやって“人間らしさ”を剝ぎ取るか。これが恐怖映画における幽霊表現の最大の課題なのである[10)]。

映画『リング』の幽霊表現が、国内外を問わずその後のホラー映画に多大な影響を与えたことは想像に難くないが、何よりも注目すべき点は、脚本家の高橋自身がこの作品を幽霊表現に特化した恐怖映画として制作したと表明しているところにある。つまり、映画版は歴とした「幽霊ホラー」なのである。そして、本稿の主題でもあるが、小説『リング』は幽霊表現に特化した恐怖小説ではない。しかしながら、1998年に劇場公開された『リング』は、紛うことなき幽霊映画として、結果的に「Jホラー」の技法を世界中に知らしめた作品となった。もちろん、この点については、映像メディアか活字メディアかという媒体に依存している部分もあるだろうが、とりあえず映画の「幽霊ホラー」と小説の「感染ホラー」という趣向の違いを確認しておくことにする。

## 3. 呪い＝感染のリアリティ

ここでは初発のホラーについて検証することを目的としている。すると、そこでもっとも重要になるのは、登場人物が死亡するのは「呪いのビデオ」を視聴したことによる「感染」の結果だという物語上の事実である。

感染すると一週間後の同時刻に無症状のまま即死するという未知のウィルスは、死者の呪いを原因として発生しており、決まったやり方で呪いを解かないと感染した誰もが全く同様に死に至る。このようにして、『リング』は科学的蓋然性に基づいたウィルス論の体裁を取るため、読者にとって「呪いの解き方＝感染の治療法」を探るという謎解きの要素は、この作品のホラードラマとしてよりもむしろミステリ小説としての醍醐味になっている[11)]。

第一章で、新聞記者の浅川和行は、箱根に出かけた四人の若い男女が一週間後の同時刻に急性心不全で死亡したことに疑問を抱く。しかもそのうちの一人が自分の姪であったために関心を強め、独自に調査を進めていく。初版本には文庫本以降削除されてしまった物語内部の年代が明記されているのだが、浅川はこの事件の2年前となる1988年に、宗教団体の教祖影山照高の半生を異様なほどの熱意で取材していた[12)]。しかしながら、当時の出版界は「空前のオカルトブーム」に飲み込まれていて、連日未曾有の数の幽霊譚や心霊写真が投稿されて大混乱に陥っていた[13)]。それ以来、編集室がオカルト的な内容全般に強い拒否感を持っているため、浅川は今回の記事が神秘性を煽るものにならないように配慮しなければならない[14)]。

> ウィルス、ウィルスと、浅川は階段を上りながら二度つぶやいた。そして、やはりまず第一に科学的な説明を試みることが先決ではないかと思い直す。ここで、急激な心臓発作を生じさせるウィルスの存在を仮定したとしよう。超自然の力を仮定するより、いくらか現実的であり、他人に話して笑われる心配も少ないように思われる。

現在まだ地球上で発見されてないにしても、隕石の内部に閉じ込められてごく最近宇宙から飛来したとも限らない。あるいは、細菌兵器として開発されたものが漏れた可能性もないとはいえない[15)]。

話題になった恐怖映画はひと通り見ているという浅川の述懐からは、有名な感染ホラー映画である『アンドロメダ…』（1971）や『クレイジーズ』（1973）を想起していることが読み取れそうである。だがここでは、彼が「超自然的な力」を根拠としたオカルト的な説明よりウィルスの存在を根拠とした「科学的な説明」の方が世間一般に対してより説得力を持つと考えていることの方が、『リング』のホラーを検証する上で注目に値する。

また、物語の後半において、浅川の友人で、「呪いのビデオ」を視聴して一緒に調査することになった哲学者の高山竜司が、ウィルスを「悪魔」にたとえて説明する場面がある[16)]。高山が天然痘ウィルスの根絶に対して疑義を呈すこの言葉を受けて、浅川は日本の信仰や迷信として「疱瘡神」や「疫神」を連想している。具体名が挙げられているペスト、エイズ、天然痘、さらにこの場面では出てこないが物語で重要な役割を果たす結核は、それぞれ流行年代や感染経路は異なるが、人間同士の感染であれば飛沫や体液などを媒介にした何らかの接触が発症の原因となる。そのため、ウィルス感染と言った場合、どこで何とどのように接触して感染したのかを確認する必要があるだろう。私たち読者が『リング』を感染ホラーとして恐怖する際には、その感染をどのように体験するかが問題となる。

第二章において、浅川は問題のビデオを視聴し呪いに感染する。上下二段組で五頁に及ぶ映像の描写は、細部にわたってそれ自体がミステリ小説として解くべき「謎」になっており、物語の筋書きにおいて蛇足となる部分は一切ない。『リング』は小説であり読者はビデオの映像を実際に見ることはできないが、この映像の描写は読書行為に基づく恐怖体験を統御する要石となる[17)]。ここで呪いが実際に起動しなければ、「呪いのビデオ」を媒介にした都市伝説風の挿話（エピソード）は、読者にとってリアルな

ホラーになり得ないからだ。

浅川は、このビデオを見て文字通り「呪われる」ことになるのだが、この場面は「呪い＝ウィルス」と接触した瞬間として見逃すことはできない。

> 産まれたばかりの赤ん坊の顔が、画面いっぱいに広がった。どこからともなく産声が聞こえる。やはり、テレビのスピーカーからではない。顔の下、すぐ近くからだ。生の声に非常に近い。画面に、赤ん坊を抱く手が見えた。左手を頭の下に入れ、右手を背中に回し、大切そうに抱えている。きれいな手であった。画面に見入っている浅川は、いつのまにか映像の中の人物と同じ手の形をつくっていた。何かへんだぞという気持ち……、産声は顎のすぐ下から聞こえる。浅川は驚いて自分の手をひっこめた。感触があったからだ。ぬるっとした羊水、あるいは血、そして小さな肉の重み……。浅川は放り出すようにして両手を広げ、手の平を顔に近づけた。匂いが残っている。薄い血の匂い……、母胎から流れ出したものか……、それとも……。濡れた肌ざわりもあった。しかし、実際に手が濡れているわけではない[18]。

引用文で浅川は、映像体験によって確かに子どもを受け取っている。もちろんこれは貞子の呪いの隠喩でもありウィルス感染の隠喩でもあるが、このままだと一週間後の同時刻に急性心不全で死ぬしかない。このような力強い「呪いのビデオ」の描写だけでなく、初版本の『リング』には、読者を感染ホラーに巻き込むメタな仕掛けが施されている。本の惹句には「期限は1週間　あなたは生き残れるか。」とあり、背帯には「小説の爆弾」とあるが[19]、本のカバーは赤いマニキュアを塗った手が「FUJITEX T-120」のビデオテープを差し出す構図になっている。1991年6月20日に発行されたオリジナル・リングは、このようにして「呪いのビデオ」に見立てられ、出版によって読者に呪いをかけることを企図している[20]。

さらに、第二作『らせん』で、貞子の呪いは変異した上で「リングウィルス」と名づけられ、第一作で浅川の書いた『リング』のレポートを読むことによっても感染することが判明する。そのため、『らせん』の読者は、浅川のレポートと類比的な関係にある小説『リング』の経験によって、「リングウィルス」感染の可能性が示唆される。この点について、第五作『エス』で、ビデオテープの装丁になっている初版本のみが「リングウィルス」の感染源となり、文庫版は眼球がデザインされた扉絵にワクチンの効果があるため読んでも感染しないことが新たに判明する[21)]。『バースデイ』を除く“リング”シリーズにおいては、自己言及的にオリジナル・リングの要約が繰り返されながら、こうして新たな意味が付け加わっていく。

## 4. 不可能な「オマジナイ」

『リング』におけるミステリは、浅川の姪を含む四人の男女が箱根に出かけた一週間後の同時刻に死亡した事件を追跡するところから始まる。「呪いのビデオ」のラストシーンでは、「この映像を見た者は、一週間後のこの時間に死ぬ運命にある。死にたくなければ、今から言うことを実行せよ。すなわち……」という字幕が流れるが、そこで映像が途切れてしまい「死の運命から逃れる方法」がわからなくなっている。ビデオを視聴し浅川のブレーンとなった高山は、呪いから助かる方法に「オマジナイ」と名前を付けて調査を進めていく[22)]。この「オマジナイ」の内実が明らかになるのは、映像の分析が終わり貞子の素性が明らかになった物語の終盤に差し掛かってからとなる。

四人が泊まったロッグキャビンは、結核療養所の跡地に建てられている。1960年代に、父親の見舞いに療養所を訪れていた貞子は、天然痘に罹患していたそこの医師に強姦されてから井戸に突き落とされ、そのまま生き埋めになって死んだ。貞子が落ちた井戸の位置は、四人が泊まった部屋の真下に当たる。『リング』の最終局面において、浅川と高山は貞子の遺骨を探し出すために、彼女が生き埋めになった井戸の中に

潜り込む。浅川にとってこの日がちょうど「呪いのビデオ」の視聴から一週間に当たり、「オマジナイ」が間違っていれば死ぬしかない。遺骨を掘り起こす作業が難航して浅川が諦めかけたまさにそのときに、高山は「オマジナイ」の種明かしとして憑依と供養について語り出す。

> 三浦博士の理論をもう少し詳しく教えてやろうか。現世に怨念が強烈に残るには三つの条件が必要なんだ。閉ざされた空間、水、そして死に至るまでの時間。この三つだ。つまり水のある閉ざされた空間でゆっくり時間をかけて死に至った場合、死者の怨念がその場に憑依してしまうことが多いってわけさ[23)]。

> だから……、三浦博士が言うにはよ、呪いをとく方法なんて簡単なんだ。ようするに、解放してやればいい。遺骨を、狭い井戸の底から拾い上げ、供養を済ませた後に故郷の地に埋葬してやればいい。広く明るい世界に引きずり出してやるんだ[24)]。

高山のこのせりふは、超常現象の科学的証明に尽力した理論物理学者である三浦哲三の言葉からの引用として出てくる。『リング』の筋書きで、浅川と高山は日本全土の超能力者をリストアップした三浦哲三記念館の資料の中から、山村貞子の情報を探し出したという経緯がある[25)]。このように権威づけられているにもかかわらず、三浦の理論の受け売りとなった高山のせりふが、浅川によって「あやふやだ」と評価されている点は看過できない。高山自身も「オマジナイ」の真相について確信がないまま、「彼女の遺骨をここから拾い出すことによってビデオに込められた呪いそのものが消失する可能性だって高い」と言い切ったために、三浦哲三を「インチキ学者」だと思っている浅川はさらに反感を抱くことになる。

「呪いのビデオ」を見た者が一週間後の同時刻に必ず死ぬことは、物語内部の事実である。それを前提に、高山の言う「憑依」は、井戸に生き埋めにされた貞子が、死を待ちながら現世に残した強烈な怨念を、い

わゆる「念写」のように映像化してブラウン管に浮かばせた現象を説明する概念として導入されている[26)]。

また、三浦の理論を信用していないとは言え、先ほどの高山の言葉は、浅川が貞子の「供養」を試みるための動機づけとなる。

> 浅川は山村貞子の遺骨を差木地の親戚の元に届け、彼らの手で供養してもらうつもりであった。〔中略〕身元不明ならば、無縁仏として供養してもらう手もあるが、山村貞子とわかっているからには差木地で引き取ってもらうほかない[27)]。

遺骨を運ぶことへの浅川の不安は、「身寄りの者によって供養されなければ、オマジナイの実行は完全に終了しないような気がした」というものである。その後、『リング』の筋書きにおいて、貞子の遺骨は山村家の親戚に問題なく引き取ってもらったとだけ語られる。浅川の「供養」によって物語が解決に向かわなかった経緯について、鈴木光司は映画『リング』のパンフレット所収のインタビューで、次のような裏話を披露している。

> 『リング』は最初、別のところで終わってたから。ハッキリ終わったと思える場面があるでしょう、例の遺骨の……。だけど何か納得できない。だったらヨシ、某重要登場人物を殺そう！　と後先考えずに殺しちゃった。そこからが大変ですよ。自分が前書いた部分をパラパラめくって、考えに考えて……。そしたらオオッ、これで終わることができるっていう今のラストが見つかったわけ[28)]。

引用文で殺されたという「某重要登場人物」とは、言うまでもなく高山竜司のことであり、「ハッキリ終わったと思える場面」というのは、浅川が発掘した遺骨を抱きかかえる第三章「突風」のラストのことであろう[29)]。二人の考える「供養」によって貞子の呪いが解けるのであれば、『リング』の物語はここで終結を迎えるはずだった。しかしながら、こ

の後に第四章「波紋」が続き、そこで高山は貞子の呪い＝ウィルスの感染で死を迎える。高山のダイイング・メッセージは浅川にインスピレーションを与えて、実は遺骨の「供養」ではなくウィルスの「増殖」こそが「オマジナイ」の真相であることを悟るのである。

宗教リテラシーの観点から見ると、小説の『リング』は宗教文化としての死者供養の儀礼行為に関する知識や経験を読者に要求していない。「追悼」や「慰霊」ではなく「供養」を一般用語として使っていて、浅川が実際に死者のためにしたことと言えば、伊豆大島にいる山村家の親戚に井戸から掘り返した貞子の遺骨を届けただけである[30)]。

『リング』を貞子の呪いによる祟り物語だと仮定した場合、この物語には、近世・近代の怪談物のように仏教僧の介入もなければ、仏教思想による解決を示唆する兆候も全く見られない[31)]。その筋書きにおいて、宗教者が怨霊の調伏を図る回路が存在しないため、死者は決して救済されないことになる[32)]。

## 5. 感染ホラーの宗教性

ハリウッド版の *The Ring* が公開された翌年の2003年に、小説『リング』の英訳が出版されている。憑依と供養について語った高山のせりふは、そこで次のように翻訳されている。

> Shall I tell you a little more about Professor Miura's theory? There are three conditions that have to be met in order for a malevolent will to remain in the world after death. An enclosed space, water, and a slow death. One, two, three. In other words, if someone dies slowly, in an enclosed space, with water present, then usually that person' angry spirit will haunt the place[33)].

> So, according to Professor Miura, it's easy to exorcise such a curse. We just free her. We take her bones out of this nasty old

well, have a nice memorial service, and lay her to rest in the soil of her native place. We bring her up into the wide, bright world[34].

『リング』の鍵概念について、「憑依する」はhaunt、「供養」はmemorial service、「怨念」はmalevolent will、「呪い」はcurseでそれを「解く」はexorcise、さらに引用文には出ていないが「オマジナイ」はcharmという訳語が当てられている。読解に当たって、供養については原作においても宗教文化的な知識や経験があまり必要とされていないとして、憑依についてはどうだろうか。

先に引用した高山のせりふでは、「死者の怨念がその場に憑依してしまう」と表現されていた。この「憑依」の用法は、たとえば『エクソシスト』のリーガンのように悪魔が人格を「乗っ取るpossess」現象ではなく、死に行く貞子の怨念が場所あるいは人に「取り付くhaunt」現象を指示している[35]。見てきたように、貞子の呪い＝ウィルスは井戸に憑依し、ビデオに憑依し、視聴者に憑依して発症し、最終的にはその者を急性心不全で死に至らしめる。

もしも読書行為による恐怖体験が可能であるとすれば、『リング』における憑依の概念は、「呪いのビデオ」が視聴者を取り殺すという物語の事実に基づいてすでに把握されていなければならない。確証を得られない三浦哲三の理論がどのようなものであれ、物語内部において憑依は現象し、登場人物は次々と死んでいるからだ。貞子の怨念はビデオに取り付き、見た者は誰であれ一週間後に死亡する。

これまで見てきたように、『リング』の恐怖体験は、ウィルス感染の事実に呪いの恐怖を織り込んだ上で、それを「不幸の手紙」形式で構造化することで成立している。そのため、この「憑依」の事実を信じる態度が前提になければ、作品にとって理想的な読者のホラーは意味をなさない。つまり、憑依現象への信仰こそが感染ホラーの必要条件になるのだが、「憑依」を認めるということは、結果的に読書行為によって読者自身が感染する可能性を容認することになるだろう。これはまさに、

「不幸の手紙」がその読者を呪いのキャリアにすることで増殖していく構図と重なる。

ここで『リング』の恐怖体験の具体例を、一つだけ挙げておこう。作家として馳星周のペンネームで知られる坂東齢人は、文庫版『リング』の解説で「足元にぽっかりと穴が開いたような底なしの恐怖」を味わったという自分自身の読書体験を、次のように語っている。

> 実際の話、『リング』を読み終わったのは梅雨のまっ盛りの午後十時過ぎだったのだが、――そのときのことは、いまだによく覚えている――ぼくは、一人で部屋にいることに耐えられなくて、新宿までタクシーを飛ばして仲間がたむろする飲み屋へ駆けつけた。一人でいることがなんだか無性に恐く、一人でトイレへ行くのが怖くてしかたのなかった子供の時のように、他人のぬくもりを求めてしまったのだ。そう、理性ではなく本能を直撃するような恐さが、『リング』にはあったのだ。こんなこと、恥ずかしながら、初めての体験だった[36)]。

坂東は、ネタバレにならないように細心の注意を払いながら、『リング』の恐怖は「新しいモンスター」のせいであると断定する。彼によれば、これはサスペンスのクライマックスとなった第三章の先に出てくる「まったく新しい種類のモンスター（怪物ったって、ピラニア人間や恐怖の蛇男のようなものではないから安心してください）」であり、それの恐怖は「前世紀末にはブラム・ストーカーが世界に問うたホラー小説『ドラキュラ』と同じようなインパクトを持っている」という。

言うまでもなく、このモンスターは、感染と増殖を目的に天然痘ウィルスと融合して疫病の発生源となるビデオテープを作り出した、あの「貞子」のことだろう。小説の最後の場面で、妻と娘までもが「呪いのビデオ」を視聴している浅川は、二人の命を救うために疫病を蔓延させて人類を滅ぼす決意をする。坂東が『リング』のどこで具体的に恐怖したかはわからないが、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』を想起してい

ることから、やはり「感染」と「増殖」のモチーフや、小説の『リング』に特有の読者を呪い＝ウィルスのキャリアにする仕掛けなどが、恐怖体験に一役買ったに違いない。

大道晴香は、1980年代の「こっくりさん」について、当時の専門書は宗教的な専門家の介在しない降霊遊戯の気軽さを売りにしながら、制御できない神霊の恐怖を含意する護符を付録にしていたと指摘する[37)]。主に少女たちだったという当時の読者は、自分の知識と経験を総動員しながらこれらの護符に対して適切な理解と運用をしていたことだろう。というのも、下手に対処しようものなら制御できない神霊に取り付かれてしまうからだが、恐怖を煽ることで読者に「神霊」について教育するここでの意図は明白である。

冒頭で紹介したように、映画『エクソシスト』の「嘔吐袋」は、一部の観客が引き起こす可能性のある身体反応への配慮のみが目的で、「神聖への冒涜」に対して保護する宗教的な役割は担っていない。それに対して、降霊遊戯の専門書が付録にする護符ならば、見かけ上の安心感を与えるのに効果があったのかもしれない。しかし、専門家による宗教儀礼とは一線を画した素人のための降霊遊戯であるからには、この場合の受け手に救済の根拠となるような信仰があったかどうかは判然としない。そこがもしも「あやふやだ」とすると、この護符は、「こっくりさん」の恐怖を払拭するためには限定的な効果しか持たないだろう。

また、高橋綾子と藤井修平は、新型コロナウイルス禍におけるアマビエの流行を具体的な対象に、妖怪の社会的機能の調査を行っている。それによるとアマビエは現代の妖怪が担うような娯楽機能だけでなく、「疫病の退散を祈願する信仰的な機能や、感染症終息の願いを周囲に伝播し共有する機能を備えている可能性が示された」という[38)]。アマビエ信仰に参与する宗教実践が「不安の緩和」につながるかどうかは今後の課題ということだが、こうした振る舞いを宗教リテラシーの観点から疫病退散の信仰活動として捉えると、本稿の問題関心とも接続する。

パンデミックという社会的事実によって、妖怪アマビエの効験が顕在化したのだとすれば、このようにアマビエが機能する社会のあり方こそ

が、宗教的な教養を身に付けるために教育的な役割を果たすことだろう。それにしても、科学的蓋然性に基づく感染の可能性を乗り越えて、アマビエが救済を祈願する信仰の拠り所になるのかどうか。これもまた、宗教実践として救済の根拠が「あやふやだ」とすれば、感染ホラーの物語はまさにこうしたあやふやさから恐怖を生成しようとするのだ。

鈴木光司の『リング』は、初版の出版時点から単行本自体が「呪い＝ウィルス」の感染源であり、恐怖した読者がキャリアとなってさらに「増殖」させるように現実の行動を促している。発売から文庫化を経てその恐怖はじわじわと口コミで広まったというが、読者を呪いの当事者にする「不幸の手紙」の枠組みも、人に語らずにはいられない要因の一つである。『リング』の呪いは、オカルト的な都市伝説を科学的なウィルス論の枠組みで語ることで、普遍性を獲得しようとする。ここに、宗教文化的な道具立てによって恐怖の払拭や不安の緩和に役立ちそうなものは何もないが、それを顕示することこそが、逆説的に感染ホラーの宗教性と言えるものになっている。

本稿では、宗教リテラシーの観点から、なぜ『リング』は怖いのかを問題にしてきた。感染ホラーの原点となったオリジナル・リングにおいて、貞子の怨念は憑依のリアリティと供養の不可能性によって、呪い＝ウィルスのキャリアとなった読者に救済の無根拠を突きつける。『リング』が仮に〈モダンホラー〉作品だとすれば、こうして根無し草となった信仰生活に狙いを定めて、救済なき恐怖を現在化するはずだ。恐怖体験の結果として、読者の認知する「憑依」と「供養」の宗教的意味が更新されるとき、『リング』の教育的意図は果たされたことになるだろう。

## 付記

本研究はJSPS科研費JP20K12817の助成を受けたものである。

## 注

1）宗教リテラシーの定義については以下の記述を参考にしている。藤原は「社会生活のさまざまな場面で遭遇する事態に対し、適切に対処するための判断材料となる宗教知識、ならびにその運用能力」（藤原聖子「はじめに」『世界は宗教とこうしてつきあっている』山中弘・藤原聖子編、弘文堂、2013年、ii頁）と定義し、プロセロは「宗教的な諸伝統の基礎的な建築用ブロック―主要な用語、象徴、原理、実践、格言、文字、隠喩、物語（ナラティブ）―を、日常生活の中で理解し、使いこなす能力」（スティーヴン・プロセロ『宗教リテラシー――アメリカを理解する上で知っておきたい宗教的教養』張内一史訳、麗澤大学出版会、2014年、30頁）と定義している。また、メディア・ミックスを駆使して展開するホラー作品を対象にすることから、菅谷によるメディア・リテラシーの定義「メディアが形作る「現実」を批判的（クリティカル）に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力」（菅谷明子『メディア・リテラシー』岩波新書、2000年、v頁）も参考にしている。

2）池上良正『増補　死者の救済史――供養と憑依の宗教学』ちくま学芸文庫、2019年、121–123頁。

3）一柳廣孝「心霊を教育する――つのだじろう「うしろの百太郎」の闘争」『怪異の表象空間――メディア・オカルト・サブカルチャー』国書刊行会、2020年、165–170頁。

4）リー・メラー『ビハインド・ザ・ホラー――ホラー映画になった恐怖と真実のストーリー』五十嵐加奈子訳、青土社、2021年、91頁。

5）上映当時における『エクソシスト』の反響については、関係者らのインタビューを含む以下の書籍からもうかがい知ることができる。クライヴ・バーカー、スティーヴン・ジョーンズ編『クライヴ・バーカーのホラー大全』日暮雅通訳、東洋書林、2001年、32–39頁。

6）1970年代のオカルトブームによって日本特有に文脈化された嘔吐と失神の“エクソシスト・ショック”については、谷口基の分析が参考になる。谷口基「エクソシスト・ショック――三十年目の真実」『オカルトの帝国――1970年代の日本を読む』一柳廣孝編、青弓社、2006年。

7）笹川吉晴「解説」『エクソシスト』創元推理文庫、1999年、551–552頁。

8）現代社会におけるホラー作品の宗教性について、筆者はジュリア・クリステヴァの所論を踏まえて論じたことがある。斎藤喬「クリステヴァにおける唾棄すべきものの宗教性」『文化』第74巻第3・4号、2011年。

9）文芸評論家の東は、〈不幸の手紙〉の背後には「特定できぬ他者たちの悪意の無限連鎖」があることを指摘した上で、このシステムを丸ごと取り込んで作品化したことで『リ

ング』は読者に強烈な本能的恐怖を喚起すると指摘する。東雅夫「すべての怪談は不幸の手紙から始まる！」『伝染(うつ)る「怖い話」』別冊宝島編集部編、宝島社文庫、1999年、356–357頁。

10）高橋洋「地獄は実在する」『映画脚本集　リング　リング2』角川ホラー文庫、1993年、292–293頁。

11）奈良崎の以下の論考は、瀬名秀明の『パラサイト・イヴ』（1995）と鈴木光司の『リング』、『らせん』を念頭に置いて、1990年代の日本のホラー小説シーンにおける「ウィルス・遺伝子系小説」の時代背景を概括していて参考になる。奈良崎英穂「心霊からウイルスへ――鈴木光司『リング』『らせん』『ループ』を読む」『ホラー・ジャパネスクの現在』一柳廣孝・吉田司雄編、青弓社、2005年。

12）『リング』では名前だけの登場で影山照高の詳細は語られないが、1995年11月から『小説現代臨時増刊メフィスト』で連載が始まった『神々のプロムナード』においては、彼が教祖となって宗教団体「天地光輪会」を組織する経緯がミステリの核を構成している。作者の鈴木光司は、この小説の「あとがき」で、オウム真理教の事件があったため当初予定していたストーリーを捨てたと書いていることもあり、『リング』と影山照高の関係性は判然としない。鈴木光司『神々のプロムナード』講談社、2003年。

13）鈴木光司、『リング』角川書店、1991年、15–16頁。

14）吉田の以下の論考は、小説『リング』が参照している1910年代における福来友吉の超能力と超常現象の研究、作品の時代設定と連動する1970年代のオカルトブーム、さらに「呪いのビデオ」と同じ発想で制作された1988年の『邪願霊』（石井てるよし監督、小中千昭脚本）との比較などを含んでおり、非常に参考になる。吉田司雄「回帰する恐怖――『リング』あるいは心霊映像の増殖」『心霊写真は語る』一柳廣孝編、青弓社、2004年。

15）鈴木光司『リング』角川書店、1991年、28頁。

16）「悪魔はなあ、いつも異なった姿でこの世に現れるんだ。一四世紀後半にヨーロッパ全土を襲ったペストを知ってるかい。全人口の約半数近くが死んだ。信じられるか？半分、日本の人口が六千万に減るのと同じだ。もちろん、当時の芸術家はペストを悪魔になぞらえた。今だってそうだろ、エイズのことを現代の悪魔とかって呼ばないかい。だがなあ、悪魔は決して人間を死滅に追いやることはない。なぜか……、人間がいなければ、奴らも存在できないからだ……。ウィルスはなあ、ウィルスも宿主である細胞が滅んでしまったら、もはや生きられないんだ。ところが、人間は天然痘ウィルスを死滅に追いやった……、本当かね、そんなことができるのかねえ」（同上、159頁）。

17）この点について、作家の篠田節子は次のように評している。「実際のところ、ただな

らぬ作品だった。それは謎のテープの画面描写で決定的になる。普通ならそうした部分については、主人公の内面描写でごまかす。失敗したら全体のストーリー展開の必然性が失われるからだ。しかし鈴木光司はそれをやってのける。生々しく不気味で、どこかしら感動的な画面が、読み手の脳裏に鮮やかに立ち上がる。」篠田節子「解説」『仄暗い水の底から』角川ホラー文庫、1996年、269頁。

18）鈴木、前掲書、57頁。

19）小説本文に「爆弾と知らず開いた小包のように、何の準備もなくビデオを見てしまった浅川」とあるため、読者をこれと同じ状況に陥れる意図があるのだろう。同上、64頁。

20）映画『リング2』ではシナリオが公募され、佳作として入賞した四作が『the Ring～もっと怖い4つの話～』（リング研究会選、1998年、角川書店）として出版された。これは、初版本『リング』よりもさらに手の込んだ形で、本のサイズ、カバーのデザインがそのままビデオテープになっている。

21）鈴木光司『エス』角川書店、2012年、274頁。

22）先に言及したように、浅川の神秘性への態度には社会的文脈として1988年のオカルトブームへの反省があるというのだが、高山が発する「オマジナイ」という語彙の使用についても1980年代以降の占い・おまじないブームを考慮すべきだろう。当時の宗教文化的背景については、橋迫の記述が参考になる。橋迫瑞穂『占いをまとう少女たち　雑誌「マイバースデイ」とスピリチュアリティ』青弓社、2019年。

23）鈴木、前掲書、184頁。

24）同上、184頁。

25）吉田によれば、小説の『リング』において、超心理学者福来友吉と女性被験者との関係は、貞子の父母である井熊平八郎と山村志津子との関係に置き換えられ、福来の思想や研究方法は三浦哲三に投影されているという。吉田は、作中に出てくる三浦の思想が福来の「観念生物論」の引き写しであることを、著者の鈴木光司が参照したとされる中沢信午の『超心理学者福来友吉』（大陸書房、1986年）の記述と照合しながら論証している。吉田、前掲書、175–176頁。

26）この現象は浅川によって「念像」と呼ばれる。鈴木、前掲書、131頁。

27）同上、193頁。

28）『リング』『らせん』制作委員会「鈴木光司インタビュー」『リング』『らせん』（パンフレット）東宝、1998年、5頁。

29）「竜司の声を聞いても、助かったという実感は湧かなかった。浅川はまるで別の空間を浮遊し、夢見心地で山村貞子のしゃれこうべを胸に抱いてうずくまっていた。」鈴木、前掲書、187–188頁。

30）第六作『タイド』において、大島差木地にある山村家の菩提寺は「龍丹寺」であると判明する。鈴木光司『タイド』角川書店、2013年、112頁。

31）この点については、以下の拙稿を参照されたい。斎藤喬「『怪談牡丹燈籠』を読む――お露の恋着と良石の悪霊祓い」『〈江戸怪談を読む〉牡丹灯籠』白澤社、2018年。斎藤喬「『真景累ケ淵』と『怪談』における恐怖の語り――Jホラーは怪談噺の夢を見るか？」『ユリイカ』第54巻第11号、2022年。

32）映画『リング2』では、仏教僧ではなく超心理学を信奉する医師による科学的実験の試みとして、貞子の怨念の慰撫が試みられ失敗している。また、第六作『タイド』では、第四章全体が主人公による大峯山での奥駈修行の描写に当てられており、貞子の怨念の慰撫が試みられている。『エス』と『タイド』は『リング』と『らせん』の後日譚であり、『タイド』はもはや科学的蓋然性に基づいたウィルス論の体裁を取っているようには見えない。そこには菩提寺龍丹寺への言及や大峯山奥駈修行の描写などから、これまで以上に貞子の供養に焦点化していると言える部分もあるが、怨霊の調伏には至らないようだ。最終的には作中で貞子を神に祀るしかないと思われるが、『エス』以降の新シリーズを感染ホラーとしてどのように捉えるかについては別稿を期したい。

33）Koji Suzuki, *ring*, tr. by Robert B. Rohmer and Glynne Walley, London: HarperCollins Publishers, 2003, p. 244.

34）*Ibid*., p. 245.

35）こうした憑依現象の二側面に関して、筆者は明治期の精神医学者荒木蒼太郎の所論を踏まえて論じたことがある。斎藤喬「明治期日本における精神医学と狸憑き」『アカデミア　人文・自然科学編』第21号、2021年。

36）坂東齢人「解説」『リング』角川ホラー文庫、1993年、328頁。

37）大道晴香「一九八〇年代の「こっくりさん」――降霊の恐怖を払拭する「キューピッドさん」の戦略」『怪異と遊ぶ』一柳廣孝・大道晴香編、青弓社、2022年。

38）高橋綾子、藤井修平「新型コロナウイルス禍のアマビエにみる妖怪の社会的機能」『心理学研究』第93巻第1号、2022年、63頁。